伝えるための 29 の技術

第三の指導技術

第 5 版

平成２４年１月

公立小中学校

元校長　山脇一郎

☆無断転載を禁じます☆

第三の指導技術(第５版)　　目　　次

1. 授業を見てきた観点から・・・ 2　　2.第三の指導技術とは・・・3
3.第三の指導技術・・・・・・・・5
① ほめる・励ます・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
② 叱る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
③ 三日坊主・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
④ 指示は徹底する・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
⑤ 机間指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
⑥ モチベーションを下げない声がけ・・・・・・・・・22
⑦ 作業の指示は必ず繰り返す・・・・・・・・・・・・23
⑧ 常に複数の説明方法を用意する・・・・・・・・・・24
⑨ きちんとする方が心地よい・・・・・・・・・・・・25
⑩ “儀式”をすることで次の課題に取り組ませる・・・26
⑪ 抽象的な課題を具体的な指示におきかえる・・・・27
⑫ 自尊心に訴える・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
⑬ 子どもに直接アクセスする言葉を挟みこむ・・・・30
⑭ 満面の笑顔・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
⑮ 驚く・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
⑯ 涙がキラリ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
⑰ 視線を細かく走らせる・・・・・・・・・・・・・・・33
⑱ クイズをしてみる・・・・・・・・・・・・・・・・・34
⑲ 発問と、その対応を工夫する・・・・・・・・・・・35
⑳ ものわかりの悪い教師を演じる・・・・・・・・・・37
21 融通のきかない教師を演じる・・・・・・・・・・・38
22 立つ位置の工夫・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
23 アニメのキャラクターを利用する・・・・・・・・・39
24 大きな声・・・40　　25.話術・・・40
26.授業に変化をつける・・・・・・・・・・・・・・・42
27.子どもの前で迷わない・42　　28.一人はみんなのために・・43
29.授業でのフォーマルとインフォーマル・・・・・・・・・・・・・43
4.第三の指導技術成立の要点・・44　　5.あとがき・・・・・・・ 44

第　三　の　指　導　技　術

1.授業を見てきた観点から

教科指導の技術と生活指導の技術を身につければいい授業ができるという前提で、あらゆる研修は組み立てられてきたように思う。すべての教育書もそういう前提で書かれており、いつしか教科指導の技術と生活指導の技術を身につけることが優先事項になっていったように思う。つまり「何を伝えるか」が中心になってきたように思う。

しかし、現場の教員は、いい授業というものはどうもそれだけでは成立していないと第六勘で気づいていた。しかし、その気づいたものが何かよくわからなかった。私は人としての「華」があるかないかだと思ってきたし、ある人は教員に向いているかいないかだと思っていた。教育学は、指導法と評価の工夫だという。どれもあたっているがどれもあたっていない。そういうことに頭をめぐらせているうちに、私はいい授業には何か別の要素もあるのではないかと考えるようになった。

私は、これまで子どもが騒いだり飽きたりするのは、授業が練られていないからだという論の立て方をしてきた。しかし、よくない授業においても、正しい知識をしゃべっているし子どもにしっかり発問もしている。何も間違ったことは教えていないのだが、子どもはついてこない。私には原因がよくわからなかった。

小学校に異動して、授業を数多く見ることができた。見ているうちに、いい授業には教案の練りこみ以外に別の要素があるということに気がついた。特に低学年の指導では、集団訓練がかなり大きな要素となっており、その集団訓練は形を変えて他の学年でも生かせることがわかってきた。またそういった集団訓練は、形を変えて中学校でも行われていたことに気がついた。

そして、ついに確信するに至ったのである。第三の指導技術といった分野のあることを。

第三の指導技術とは、集団を制御するためのまた子どものモチベーションを高めるための、つまり「伝えるための」多種多様な指導技術を私なりに総称したものである。私は、様々なテクニックを第三の指導技術として表現したほう

が、若い教師が今後に生かせると考え、私の知っている限りのことすべてをまとめてみた。

2.第三の指導技術とは

第一の指導技術は教科指導、第二の指導技術は生活指導技術と考えているが、この二つは「何を伝えるか」が重要な問題である。これについての論は本書の目指すところではないので触れないこととする。

第三の指導技術とは、「どう伝えるか」という技術であり、これまであまり脚光を浴びなかった分野である。

●教材研究をすればおもしろい授業になるのか

そもそも、教育の世界では「教材研究を深めればおもしろい授業ができる」というのが通説のようになっている。

しかし、これは半分しかあたっていない。例えば、名人の語る落語も素人の語る落語もシナリオやせりふは同じである。双方とも言わば教材研究がきっちりとできた状態なのである。同じ落語を語っても名人は客をぐっとひきつけるし、素人の芸は恐らくそれほどおもしろいものにはならないだろう。

では双方の差はどこにあるのか。それは、伝えるための技術、つまり「第三の指導技術」があるかないかなのである。ごくしっかりとした授業内容であるのに、子どもがだれるといったことがある。私も何かが違うと感じていたが、今にして思えば第三の指導技術が甚だ不足した結果だということに気がついたのである。

だから、今まで教育界の常識として言われてきた「教材研究さえすればおもしろい授業ができる」というのは、それだけではないのである。教材研究は極めて大切であるしその大切さ今更言うに及ばない。しかし、それだけでは魅力ある授業とはならない。豊富な第三の指導技術を身につけ、状況に応じて活用することが不可欠なのである。

●教師はなにゆえ専門職なのか。

教師は専門職と言われる。それは何故なのだろうか。

知識の量から言うと、教師より知識を持っている人は多い。技術にしても教師よりすぐれた技術を持っている人は多い。知識や技術の量で判断するなら教師が専門職とは言い難いかもしれない。

では、なぜ専門職なのか。

それは、私が以下に縷々示したような「第三の指導技術」という膨大な技術群を、子どもの年齢や状況に応じて自由にかつ素早く選択して繰り出すことができる点である。今、どの技術を繰り出せば伝えきれるかを、一瞬で判断し実行する力をもっていることこそが専門職たる所以なのである。

ここにこそ、教師が長い時間経験を積みかつ研究と修養の必要たる理由が存在するのである。

●第三の指導技術の性格

授業や生活指導というのは言わばコンピュータで言うところのアプリケーションにあたると考えられる。片や、この第三の指導技術は、コンピュータのOS(ウィンドウズなどのオペレーションシステム)にあたるものであり、様々なことを指導していく際に必要な共通の「決まりごとや約束事」などの技術を指す。

この第三の指導技術は、学年当初に各クラスで約束事を作っておいたりすることである程度は作られていくわけであるが、小学校の指導を見ていると話と話の間などに何気なく挟みこむ言葉や態度もそれにあたる。あまりにも何気ない言葉や態度であるため、授業参観で教師の授業を見ていても、ほとんど意識されず見過ごされてしまう。

しかし、子どもをみているとある言葉で子どもが背筋を伸ばしたり、もう一度集中力を高めたりすることがある。不思議だが、確かに第三の指導技術は存在すると考えたほうが説明がつきやすいことはよくある。研究授業の指導案などでは、こういう第三の指導技術が書かれることはないし、その限りにおいて普通は伝承されにくいと思われる。ベテランが経験則によって身につけた技術とでも言おうか。

●第三の指導技術の活用場面

教科指導技術でも生活指導技術でもない、第三の指導技術とは次のような場面で必要である。

全体の子どもにしっかりと聞かせる、聞く姿勢にさせる、全体または個々の学習へのモチベーションを高める、といったものである。

第三の指導技術とは、言わば「教員の息遣い」とも言えるものである。これをうまく使うと、極めて緻密な授業が展開できる。

いい授業とは、いい教材研究と指導案と熱意の成果だと思われやすいが、第三の指導技術を抜きにしては語れないものであると考えている。第三の指導技術は指導に緻密さ付与するものであり、観察力・判断力・演技力・表現力・感受性・表情の豊かさ、等々の実に多彩なテクニックを必要とする。今後もっと注目されなければならないだろう。

●第三の指導技術の宝庫

第三の指導技術の宝庫がある。運動会の学年練習などがそれである。学年で中心となる教師が全体の指導を行うわけであるが、叱ったりほめたりするタイミングが絶妙である。ほめ方・叱り方にしても、さまざまなテクニックを駆使して集団をまとめていく。こういう場面は、第三の指導技術の宝の山で、若い教員はぜひ目と耳を開いて多くの技術を盗んでほしいと思う。

3.第三の指導技術

☆熱血指導編

① ほめる・励ます

これは最も基本的なことである。どの学年においても、これは極めて有効な方法である。特に低学年では教師がほめた方向に子どもは向くという法則がある。

私が児童集会で、朝校門で帽子をとってあいさつしてくれる人がいると紹介をしたら、そういう子が増えてきた。また教室での学習でも、ほめた方に向かう傾向はどの子にもあるが、問題は個人によってそのモチベーションの持続時間に差があるということである。机間指導で、子どもの集中力等を観察しながらほめ方や頻度を含めた指導方法を緻密にかつ瞬時に組み立てていくことが大切である。

とにかく、ほめることは大切であり、いいところを見つけてはこまめにほめることは基本である。

a.本人に対して直接ほめる

まず、本人に向かってほめる方法がある。最もオーソドックスであるし、子どもにも教師の思いがストレートに伝わる。「えらいね」「先生、びっくりした」「すごいね」「上手やな」など感嘆符を交えてほめるのは、学年にかかわらず基本であるし効果がある。「この前よりうまくなったよ」と、時系列でほめることも時には有効である。不思議なもので、こういうふうにほめていると教師の方も本気でそう思えてくる。そうすると、その子のいいところをしっかり見つけてやろうといった気持ちにもなる。ほめているうちに、本当にその子が好きになるのである。

ほめることは、子どもと教師の人間関係をより密接なものへと変えていくのである。

b.みんなの前でほめる

みんなの前でほめる方法もある。この方法はかなり有効な方法であるが、ともすれば他の級友からのやっかみを招くことがあるので注意が必要である。

ほめるのが特定の者に偏ってしまうと、教師がひいきしていると思われてしまい、他の子どもへの指導がやりにくくなることがある。

また、ある行為である子どもをみんなの前でほめた場合、そういう行為な

ら自分もしていたという子どもが何人か出てきてしまうことがある。こうなるとほめたことの意味がなくなるし、教師の学級経営の根幹さえゆらぎかねない。

みんなの前でほめる場合には、その子どもの行為がみんなの前で特別にほめられるに値するかどうか、十分な調査と読みを入れてから行わねばならないのである。

c.うわさを利用してほめる

あえて、うわさを利用する方法もある。ほめ言葉を直接本人に言わないで、当該の子どもの友人などに言うのである。こうして教師がほめたことは、人づてに本人に伝わることになる。これは絶大な効果がある。小学校高学年以上なら、この方法は極めて有効である。

時には、本人に対して直接ほめるよりはるかに効果がある場合がある。「へー、あの先生は自分のことをそんなふうに思っていてくれたんやな」と子どもの心にすとんと落ちる。

しかし、この方法には、逆もあることを知っておく必要がある。つまり、ある子どもの批判をした場合、これも人づてにたちどころに本人に伝わるということである。

子どもの前で他の子どもを批判してはならない。

d.友人の言を引用してほめる

友人の言葉を借りてほめる方法もある。「〇〇君は、君のことをこんなふうにほめていたよ」という言い方である。これは、一度に二人の人からほめられるわけであるから、効果は大きい。

ただ、この方法はあくまで他人の言を借りるわけであるから、そのことを伝えたことで二人の子どもの人間関係に妙なひびが入らないか、また言を借りられた子が納得しているかなどについて事前に十分調査をしておく必要がある。

「みんな、君のことをほめていたよ」と言って、「みんなって誰や」と聞かれたとき、名前を出すことが今後にどういう影響が出るか等の調査をしっかりとしていない場合には、教師は立ち往生することになる。この方法は、事

前の調査と精緻な読みが必要である。

e.他の教師がほめていたことを追認する

小学校では遠足などのあと、校長先生や担任外の先生が態度などをほめることがある。ところが、子どもは校長先生などはほめるしか選択肢がないことに感づいているのであまり喜ばないようである。

ところが、その後担任が、「〇〇先生からほめてもらったね。よかったね」というと、効果は抜群である。担任はほめる選択肢も叱る選択肢も持っている。その担任が、他の教師のほめたことを追認するわけであるから効果があるのである。

f.励ます

励まし方も多様である。「がんばれ」は最も定番であるし、多くの場合この言葉は大きな励ましとなる。

ただ、不登校で学校に来ていない子にがんばれというと「学校に来れるようにがんばれ」と解釈する子どももおり、登校へのプレッシャーともなりかねない。

また不登校の子どもの中には、家で自分について考え続けている子も多くおり、精神的には限界までがんばっている子どももいるのである。従ってこういう場合、「がんばれ」は励ましにならないどころか、追い詰めることにもなりかねないのである。細心の注意が必要である。こういう場合はひとつひとつの事象について「よくできたな」と言うほめ方もある。

「君のやってることは間違ってない。自信を持って」と励ます方法もある。

いっぱいまでがんばっている子どもに対しては「まあ、ぼつぼつといこか」と気を楽にさせるほうが励ましになることがある。

また、何気ない世間話が励ましになることもある。その子の状況や個性に応じて励まし方を組み立てていく必要がある。

前日、猛烈に叱られた子どもは大なり小なりその先生と顔を合わせにくいと思っている。そういうときには、ろうかなどで肩をぽんとたたいて、教師の方から満面の笑みで「おはよう」とか「元気か」などと軽く声をかける方法がある。昔、ある荒れた中学校が「ニコポン」運動として展開していたや

り方である。

g.過去形でほめる

ほめる言い方にも色々とあるが、原則として過去形でほめることが大切である。

「最近、やる気になってるねえ」は、解釈のしようによったら冷やかしともなる。私なら、確実に冷やかしととるだろう。また現在進行形でほめるのは、子どもにとっては現在もそういうふうにやる気になっている姿を見せ続けなければならないということであり、プレッシャーともなりかねない。

「最近、やる気になったねえ」なら、ああよく見ていてくれたんだなと納得できるのである。結果としてあらわれたことに対してほめる方が人間というものは納得できるようである。些細な言葉の使い方の違いではあるが、教師は、そういった感性を常に磨いておくことが大切である。

h.改善を指摘する場合

指導していて、子どもに改善を指摘したい場合がある。この場合はまず、いいところをほめてから、改善点を指摘していくことが大切である。先に指摘してしまうと子どもにとっては、悪いところばかり言われたという気持ちになる。

「ここのところは上手やな。よくできてるよ。〇〇のところももう少していねいにやってみようか」などと、先にほめることが大切である。

ほめるところがなかなかみつからない場合もあるかもしれない。その場合でも、「君の気持ちが伝わってくる」とか「君がまじめだというのがよくわかった」とか、態度や気持ちをほめるという方法もある。

i.改善が見られた場合

特に以前注意したり叱ったりしたことについて改善されていたら、しっかりほめておくことが大切である。ここは最大限にほめていい。「君は、しっかりがんばれる子だ。先生は感心した。先生はうれしい」と自分の気持ちを率直に出してほめることが大切である。絶対に言ってはならないのは、「君がこうするとは珍しい、雨が降るかもね」などの皮肉である。

皮肉は禁物。子どもは傷つく。
改善が見られたら率直にほめることが大切である。

j.ほめながら全員に指示を出す

これは、何か作業をさせているときなどに、机間指導をするのであるが、一人の子どもをほめてかつ全体に指示を出していく方法である。
例えば机間指導しながら、
「〇〇さんはちゃんと矢印を守ってる、えらいなー」
と大きな声で言うのである。ほめられた子はうれしいし、同時にクラス全体への指示にもなるのである。そして副次的な効果としては、他の子どももほめられようとがんばるのである。

②叱る

叱るということは、究極のところ許すことであると心得たい。
そして、叱ることは以下に示す多くの第三の指導技術の裏づけとなるものである。教師は、子どもが指示をきかないときはきっちり叱るという技量を持つ必要があるし、そういうことを子どもにも常に感じさせておくことが大切である。叱ることはいわば、「奥の手」とも言える。「奥の手」のない指導は成功しないことが多い。きっちり叱れる技術は、すべての指導の根本とも言える。小学校でよくやる方法に、「五つ数えたらお口を閉じます。5.4.3.2.1.0」というのがある。これなどは、叱ることをその裏にもっていないと徹底しない。叱られないのだったら、別にいうことをきく必要もないからである。
一例をあげる。
「五つ数えたら静かにします。5.4.3・・。それでは授業します」　ざわざわしたまま始める。いったい何のためのカウントであったのかと思う。
ある教師は、「・・・3.　2.・・・」あたりで、目が据わってくる。万一まだしゃべっている子がいると、ここから壮烈な叱責が始まる。私が見ていてもいたたまれなくなるほど怖い。その叱責のあとカウントするとぴたりと静まる。これが力量である。
このカウントにも色々な方法がある。カウント外になる子どもが多数出てもよいのか(当然この場合には厳しい指導が必要となる)、すべての子どもをカウント内に収めるのか(これは急がせる効果を狙うものであり、最後の方を

わざとゆっくり数えたりする)を決めて、カウントすることが大切である。中途半端が最もよくないのである。

a.子どもの年齢により叱り方は全く異なる

総じて、低・中学年では、「・・・しなさい」「・・・してはだめ」と叱り飛ばすのはあまり効果がない。私も小学 2 年生に対して中学式に怒鳴ったことがあったが、きょとんとはするものの伝えることはできなかった。低学年あたりでは、「みんなが静かにしたら先生は怒らなくていいんやけどな」とやんわりいく方法もある。

小学 1 年生で、仮に体育で着替えるのにいつまでも遊んでいる子がいたら、「お着替えする時間だよ。ぐずぐずしてると楽しいドッジボールができなくなるよ」「かしこい子はさっと着替えます」「さあ、着替えを始めようか。いつまでもあそんでいるとチームに入れないよ」など、語りかけの口調で罰も含めて言い聞かせることが大切である。実際に遅れたために 20 分ほど参加させないというハンディを示せば、より効果は絶大である。クラスで遅れた場合の参加の仕方について約束ごとを決めておくのもいいだろう。

「はよせえ」「いつまであそんでるんや」などとどなるのは、高学年・中学生にはそれなりに効果があるが、低学年では大声で怒鳴っても子どもの態度や顔色が変わることはない。つまり、伝わっていないのである。

子どもの年齢に応じて教師も根本のところから叱り方を変えないと、伝わらないのである。小学生というひとくくりで叱り方を考えることはあまり意味がない。

低・中・高学年ではそれぞれ文化が全く異なるので叱り方は全く別物と心得たい。ただ、共通しているのは、方法の違いはあってもこまめに叱り注意しほめることは極めて大切だということである。

中学でも、叱れる技量が教師の力量の中のかなりの割合を占める。「座りなさい」と言った場合でも、叱れる技量のある教師の指示はよくとおるが、叱れる技量を持ち合わせていない教師の指示はとおらない。いわゆる「なめられた状態」となるのである。

b.叱るタイミング

当該の行為があった時には間髪を入れずにその場で叱っておくことが大切である。その場で叱りきれない場合には、少なくともその場で注意を与えておかねばならない。注意だけでもしておけば、後で叱ることは十分に成立する。

見て見ぬふりをしてしまうと、子どもは先生にその行為が承認されたと思うので、あとからは叱りにくくなる。特に中学生では、あとから叱った場合教師不信につながることがある。

c.叱り方

叱り方としては、全員の前で叱る方法、個別に呼んで叱る方法、などがある。授業中のおしゃべりなどは、その場で立たせるなどして全員の前で叱ることは結構有効である。混み入った内容や、プライバシーにかかわることなどは、個別に呼んで叱ってやるほうがよい。

d.該当者が複数いる場合

また、複数でいたずらなどをした場合には、一同に並ばせて叱る方法が一般的である。たいていはこの方法で目的は達することができる。

しかし、小学校高学年以上なら別々に別の部屋に呼んで同時に複数の教師で事情聴取をするほうがよい場合がある。順番に事情聴取を行うと、その間に口裏を合わせたり、片方がもう片方を脅して不利な話をしないように圧力をかけることがあるからである。事案がおこればすぐ同時に事情聴取に入ることが、重大な生活指導事案解決の基本である。そして事情聴取した内容を一度持ちより矛盾点を洗い出して、再度一斉事情聴取にあたるといったことを短時間に繰り返すのである。こういう方法をとろうと思えば、学年などの教師のチームワークが必要だし、リーダーがしっかりまとめることが大切である。

e.叱る時間

叱る時間を考えることも大切である。子どもは総じて、だらだらと長く叱られるのを嫌がる。ぱっと叱られてぱっと終わる、のは子どもにとっては

比較的楽である。叱るということは子どもに大なり小なりストレスを与え反省の心情を導き出すことが目的であるから、少し長めに説教をするのは効果がある。ただ、あまり長いのもだれてしまって、子どもは自分がしたことの反省より長い説教への不満の方が大きくなる。従って、叱る内容や子どもの年齢・様子を観察しながら叱る時間を緻密に組み立てていくことが求められる。

f.叱り方の例

叱り方の一例としては、

段階 1　まず、事実確認をする。ここを丁寧にやっておかないとあとのことがすべて水泡に帰することになる。

段階 2　次に、やったことがいかに間違っているかをきちんと説明する。

段階 3　どういうつもりでやったのかを問い詰める。やった心情を責める。なぜやったのかを問う。(ここはある程度の時間が必要。ここで本人から反省の弁を求める)

「おまえは、そう思ってこういう行動をとったんやな。でもほんまはどうするのが一番よかったと思うのか」などと説諭していくとおのずと正しい選択枝に子どもが気づく。そのあたりから、本人の反省の弁が出てくる。

ここまで、話をしていくとたいていの子どもは不安な気持ちになる。もう何をやっても救われないような気持ちになる。しょげる子もいるし涙を流す子もいる。

ここは教師が本人の言い分をしっかりと聞いてやることが重要である。教師は、責めもするが言い分も十分聞く。そして反省の弁をうまく引き出すのである。

段階 4　助け舟を出す。

「これから、ちゃんとがんばれるか」

「明日から、どうするんや」

「こういうことは、もう二度とないと約束できるか」

「先生は、君を信じてるで」

などの言葉でしめくくると、子どもは「許された」「先生はまだ

期待してくれている」といったような救われた気持ちになるのである。ここでは本人に、明日からの決意を語らせることになる。

ただ、いくら約束させても、子どものことであるからおそらくまた繰り返すであろうことは百も承知である。教師の仕事のひとつとして、うまくだまされてやるといったことも大切である。子どもを信じた振りをしているうちに「ひょうたんから駒」ということもあり得る。教師はそれに期待する。

ベテランになると、この「助け舟」を絶妙のタイミングで繰り出す。助け舟は早すぎても遅すぎてもいけない。叱るということは、本人の過ちを問い詰めると同時に明日への力も湧かせてやることなのである。だから、教師はかなりの剣幕で叱り付けていても頭の中はけっこうさめている。頭の中では、どう組み立ていつ助け舟を出すかを緻密に測っているのである。

女子に対して男性教諭が事情聴取を行うときには細心の注意が必要である。セクハラ等の疑いが生じることもあるので、複数で事情聴取にあたることが鉄則である。

g.本人のことを思って叱る

叱るということは、単に教師の怒りをぶつけるのではない。最終的には本人のことを思って叱るのである。そういうことを子どもにも感じさせることが大切である。ガラスをわった子がいたら、「けがはないか」とまず聞いてやる。それから事実確認などをしていくのである。

叱りながらも本人に、教師の心配している気持ちをどう伝えるかを考えておく必要がある。

h.叱る内容について

叱る内容も考える必要がある。子どもによっては言い逃れに終始してしまい、肝心の指導が一向に入らないことがある。叱ることをきちっと成立させるコツは、「勝てる勝負しかしない」ということである。悪いこと、間違っていることがはっきりしていることに対して叱るのである。例えば「授業中集中していなかった」というだけでは、叱る基準がはっきりしないことが多い。こういう場合には叱りきれない恐れがある。だから教師が見た

ことや、人をなぐるなどはっきりとしたことについてまずきっちり叱ることが大切である。

i.他の子どもが訴えてきた場合

また、他の子どもの訴えに基づいて指導することがある。「あの子こんなんしてやったで」とクラスメートが訴えてきたら、教師としてはこれはすぐに叱らないと、という気になり、あわててしまいがちである。この場合、あいまいな伝聞に基づいて叱ると、本人が言い逃れをした時に教師は立ち往生することになる。

例えば十分な調査を行わずに当該の子どもを叱って言い逃れをされた場合、「〇〇君はこういってたぞ」という迫り方しかなくなることが多い。

例えそのことが本当であれうそであれ、当該の子どもの恨みの矛先は〇〇君に向くことになってしまう。クラスメートなどが訴えてきてもすぐに当該の子どもを呼んで叱るのは絶対に禁物である。

こういった場合には、訴えてきた子どもを含めてできるだけ複数の子どもから詳細な事情聴取をしておくことが必要である。事案の日時、場所、子ども同士の立ち位置から会話の内容に至るまで詳細に情報を収集しておくことが、当該の子どもに対する指導を成立させる要件である。このときに証言する子どもの中には伝聞を自分が体験したように証言することもあるので注意が必要である。

このようにして事前に詳細な情報を入手しておいた上で、当該の子どもを叱ることが大切である。

上記のように言い逃れをされた場合でも、十分な調査を行っておれば教師が知っている事実と照らし合わせて根気よく矛盾点を解きおこしていくことができる。このとき大切なのは、証言をしてくれた子どもの名前を、当該の子どもに知られないように話を進めることが大切である。

叱っていて子どもに事実を否定されたときに、二の矢、三の矢、四の矢が出せるかどうかが、指導のポイントとなる。

従って、子どもが訴えてきてもあわてないで対応することが大切である。

j.以前のことは持ち出さない

これは大切な心得である。教師は、今叱っていることはそのことだけを真剣に叱らなくてはならない。「おまえは前にもこういうことをしたやろ」と迫るのは禁物である。子どもにとっては、以前のことは叱られて終わったことだと思っているのに、また持ち出されたのでは反省のしようがないのである。以前のことは絶対に持ち出さないこと、これは鉄則である。

k.公平に叱る

教師は、全ての子どもに対して公平に叱らなくてはならない。中学では、おとなしい子どもも、非行歴のある子どもも同じ基準で叱ることが求められる。やんちゃを叱るのは、はっきり言って教師としては気が重い。しかし、そういうやんちゃを叱る教師の姿を、他の子どもは頼もしい思いで見ている。

従って公平に叱る教師は全ての子どもから絶大な信頼を得ることになるのである。小学校でも原則は同じである。同じ基準で公平に叱ることは、教師の大切な資質である。

ちなみに、叱るときなどに公平性を欠くと「えこひいき」という烙印を押され、教師不信につながってしまう。

l.人格を否定しない

これは、叱るときの大原則であるといえる。教師は、実際に起こった事象についてだけ叱ることが大切である。

「おまえは、なにをやっても長続きしない」「こんなことも守れないおまえは、人間のくずだ」といった叱り方は子どもの人格まで否定してしまう。教師は、生起した事実についてだけ叱ることが大切である。

罪を憎んで人を憎まず、けだし名言である。

m.子どもを比較しない

叱りながら、他の子どもと比較するのは絶対禁物である。「〇〇君はこんなふうにできているのに、おまえはなんでできないのや」とやってしまうと、子どもは教師の本意が〇〇君にあって自分のことはどうでもいいんだと察

知する。こうなると指導は入らないし、恨みの矛先は〇〇君に向けられる。時には、これが壮烈ないじめにつながることもある。

叱る際に他の子どもとの比較は絶対にしてはならない。絶対評価で叱る、本人のことを思って叱るという姿勢を最後まで貫くことが大切である。

n.体罰は逆効果

信頼があれば体罰は有効という人がいる。体罰は本人に屈辱感しか残さないし、大なり小なり教師への恨みを残す。その恨みが教師への信頼より小さい場合に表面化しないというだけの話で、教師への信頼が崩壊したとき体罰への恨みが一気に顔をのぞかせることになる。

まして、体罰でけがでもさせたら、教師が頭をすりつけて親と子どもの前で謝罪せねばならないことになる。これでは、逆効果となる。体罰は法律の規定を待つまでもなく効果の極めて薄い指導方法であると言えるし、教師に力量のない証でもある。

o.敢然と叱る

叱るときは、敢然と叱りきることが大切である。「だめやで」と言って子どもが冗談で返すような叱り方では逆効果となる。力量の乏しい教師は、子どもと相対峙する気迫に欠けるので、子どもの機嫌をそこねないような叱り方をしてしまう。当然、子どもは言うことを聞かないし、「教師をなめる」状態になる。その結果、子どもは荒れる。

注意するというレベルで考えるなら、耳元でささやくように注意する方法もある。これは高学年や中学生には効果がある。とくに中学生のやんちゃ連中には多大な効果があった。彼らの自尊心を満たすからである。ただし、異性の子どもには禁物である。

ただ、叱ったからといって、必ずしも子どもの行動が即正しい側のベクトルに向かうわけではない。これを期待しすぎると、たいていの場合教師に大きな疲労感だけが残る結果となる。

叱ると同時に望ましい方向にむけるほめ方をしておくことも必要である。叱りっぱなし、は効果が薄いと思われる。「ほめる」か「しかってほめる」か、各子どもの性格や状況を見て瞬時に判断することが大切である。専門

職の専門職たる所以である。

p.叱ったことをひきずらない

ある場面で子どもを叱っても教師はそのことをひきずらないようにしなければならない。子どもにとっては叱られることはつらいし気持ちも落ち込んでいる。反省しなければとも思っている。教師がいつまでも気持ちをひきずってしまっては、子どもは立ち直れない。教師は、場面がかわれば叱っていた気持ちをリセットして、普通に接することが大切である。これも教師の大きな心得である。

q.「みすてられ感」を持たせない

これはいままで縷々述べたことと重複するが、勢いにまかせて叱りっぱなしにしてしまったりすると、子どもによっては「見捨てられ感」を持ちかねない。これは、してはいけないことである。しっかり叱ってきっちりフォローすることが大切である。叱ることの極意は、励ますことと心得たい。

r.本人だけを叱る

子どもを叱っているとついつい教師が熱くなってしまうことがある。そこで、「親の顔がみたい」とか「親のしつけはどうなってるんや」などと、出てしまうことがある。これは絶対に言ってはいけないことである。親に言いたいことがあれば、大人だけの場でじっくり話し合えばいい。子どもの前で親の批判をしてしまうと、保護者に強烈な学校不信を引き起こさせてしまう。

保護者も、子どもが悪いことをして叱られるのはたいてい納得してくれている。しかし、子どもの前で保護者批判をすることとは全く別の話なのである。

s.必ず逃げ道を用意しておく

これは大切なことである。叱っていれば本人の言うことのどこが本当でどこがうそか、だいたいわかるものである。

ところが、すべてのうそを問質そうとしてしまうと子どもをただ追い詰めてしまうことになり、そのことのプレッシャーが別のところから噴出しかねない。

うそは問い詰めなければならないし言い逃れも厳しく問質すことが必要である。しかし、本筋からはずれるような言い逃れやうその中には、うそとわかっていてもなるほどとだまされてやるほうがいい場合が結構ある。このように逃げ道を用意しておいてやるのは、叱ることの必須条件とも言える。ただ、逃げ道を用意することは決して中途半端に叱ることではないし甘くすることでもない。

厳しく叱るからこそ、逃げ道を用意しておく必要があるのである。

これは小学生でも中学生でもいや大人でも大切な心得で、どんなに厳しく叱りつけても、最後は必ず逃げ道を用意しておいてやることが大切なのである。

何が逃げ道にあたるかはケースバイケースで異なるが、経験を積むとわかってくる。

要は子どもをとことん追い詰めすぎないことである。

パワフル授業編

③ 三日坊主

これは、すぐに投げ出してしまうという話ではない。

学級経営の成否は新学期の初めの三日間で決まるということである。三日坊主とは、三日間は坊主になって徹底的に説教をし、範を垂れることが必要だということである。

この三日間は、担任がクラスのリーダーであることを子どもに認めさせる期間であり、同時に精緻な集団訓練を開始する時期でもあるのである。

実際には新学期の約一ヶ月近くは、しつけや集団訓練に相当力を入れることが必要となる。この時期は、今まで私が述べてきた第三の指導技術の基本ルールを子どもに徹底しなければならない。集団訓練がうまくいかなければ、ひとつひとつきっちりと注意し、叱らなくてはならない。そうして、子どもに集団訓練の重要さを知らしめ、第三の指導技術の基本ルールを子どもに学ばせるのである。新学期の初めの三日間は、教師は徹底した集団訓練を子どもに施す時期の中でも特に重要なものである。

ところが、まず子どもに溶け込もうと考える教師もいるが、そんなことは後でも十分可能である。

とにかく当初の三日間とその後一ヶ月くらいは、「嫌われる教師」を目指すくらいの覚悟が必要である。

はじめの三日で絶対に訓練しておかなくてはならない最優先事項は、先生が話をするときは完全に静かにする、ということである。

これはすべてのルールの基本となるものである。教師がいったん静かにさせると決めたら、一切のひそひそ話がやむまで徹底して注意を与え、時には叱る必要がある。概ね静まればよいのではない。しゃべる者が一人でもいたらだめなのである。妥協してはならない。

このとき「5.4.3.2.1」のカウントをする方法もあるし、単に「今から先生が話をします」と切り出す方法もある。低学年では、カスタネットを使ってカウントする場面も見たことがある。それぞれの工夫のしどころである。

あとは、発言のルール、お友達の話を聞くルール、席につくルール、授業中に教室を出る時のルールなど、教師の個性を生かしながらルールを子どもに徹底していくことが必要である。

例としては、
子どもの発言中に別の児童がおしゃべりした場合、
高学年なら「人の話は静かに聞くこと」
低学年なら「今、〇〇ちゃんがお話してるから、△君は静かに聞こうね」

手をあげて発言することを徹底する場合、
低学年なら「〇〇君はちゃんと手をあげているから〇〇君」

低学年で口々に発言があった場合、
「手をあげてね。・・・お約束」「かしこいお友達はちゃんと手をあげてるよ。先生は(そういう子に)あてよかな」「はいは、一回でいいよ」

答えあわせをする場合、
「3×6 は、18 です」と答えたあとに、全員で「いいです」と順番にリズムよく言わせていく。声をだすというのもりっぱな作業であり、全員の集中度が高まっていく。

④ 指示は徹底する

「それでは先生が話をするから静かに」という指示をいったん出したら徹底しなければならない。そういう指示をしておいてざわざわした中で話を始めると、はじめの指示は全くの無駄になる。そして、この教師の指示は守らなくてもいいんだ、ということを児童・生徒が即座に学習してしまう。そうなるとその後どんなに指示をしても子どもは聞かなくなる。

結果、学級崩壊や荒れの状態となる。

だから、「全員が静かにするまでは説明をしません」とか「全員そろってからはじめる」などの指示をしたら必ず徹底しなければならないのである。

そういう面では、教師は少々がんこで融通の聞かない人格を演じる必要がある。

小学校の音楽の時間、リコーダーの練習であったが、教師の説明中もピーピー笛を鳴らしている子どもが多くいた。これなどは、はじめにきちんとした約束ができていないか、教師が指示を徹底し切れていない好例である。

中学校あたりになると、教師が指示はするもののむしろ徹底しないことが物分りのいい教師であると思われるのではないか、と思う教師が多い。結果、学級は必ず荒れ、そのつけは確実にその担当教師にかかってくるのである。

⑤ 机間指導

子どもに計算問題や書き取りなどの作業をさせるときには、教師が机と机の間を歩き回って一人ひとりのノートなどを見ていくことは極めて大切なことである。授業においては、前で行う一斉指導と机間指導は双璧であるといっても過言ではない。

机間指導では、一人ひとりの考え方ややり方などをひと目で把握しなければならない。訓練すれば、計算でもひと目で数字の違いに気がつくようになる。中学校の数学では、マイナス記号のあるなしに社会科の私でも瞬時に気がつくようになった。

当然、間違っているところは指摘することになるが、指摘はできるだけ小声で行うほうがよいだろう。子どもにもプライドがあり、自分の間違いを公然と人に知られたくはないからである。子どもが書き直してきちんと書けたら、少し大きめの声でほめる。そんなふうにして回っていると、間違いやすいところやよく理解できていないところが教師に把握できてくる。

ここで、「はい、一度手をとめて」と声をかけ、黒板でその部分を説明する。そしてまた机間指導をする。また黒板で説明をする。

机間指導はおおむねこういう流れで進めることになる。

漢字の書き順の間違いなどは、机間指導でしか把握できない。机間指導は教科指導の必須事項としておきたい。小学校では、漢字ドリルなどを使って書き順に注意して練習させる。だいたいの教師は、空中に手で漢字を二度、三度書かせて書き順を覚えさせる。その後、ドリルなどで漢字を練習させるのが常である。

ところが、いざ、子どもがドリルにかかるやいなや、多くの担任は教室の前にある事務机でノートの丸つけや次の教材の準備などにかかることが多い。つまり「作業」という感覚である。

漢字の書き順は、机間指導でその瞬間に見ておかないと後では間違いは指摘できない。その結果、当の子どもも半永久的に間違った書き順を覚えて

しまうことにもなるのである。

また、そういった書き順や「とめ」「はね」まで指摘し指導することによって、子どもはそういった細かいところまでが勉強であると思うようになる。

どれだけ細かいところまでを勉強と感じるかで、自ずと学力は決まる。

私は中学校で社会を教えていたが、漢字の「はね」まできちっとこだわる生徒は高得点をとる。「はね」をどうでもいいと思う生徒は、万事荒削りで結果として点数はとれない。

たかが漢字の書き順ではあるが、細かいところまで指摘することで勉強というものは緻密なものだと感じさせることが大切である。

漢字ドリルなどの作業中は、教師は机間指導を繰り返し、リアルタイムで細かく指導することが大切である。

⑥ モチベーションを下げない声がけ

机間指導で歩いているときに、黙ったままひたすら歩いている教師がいる。しんとするのは一見よさそうだが、子どものモチベーションはどんどん下がっていく。新任などは、ここで教師がしゃべるのは思考のじゃまになると考えているようだが、実は違う。モチベーションが下がってしまい、私語が出だす。かなり私語が出てきた段階で注意をしたりすると、子どもも叱られてやらされているという状態になり、やる気を持って問題を解くという精神状態ではなくなる。また場合によっては教師対騒ぐ全児童という図式になり、今度は騒ぐ者が多数を占める結果となり、まじめにしようとする子どもの居場所すらなくなる。その結果、もぐらたたき状態に陥り一時的な規律崩壊に陥る。

子どもの思考を妨げずに、モチベーションをあげ続けるには、適度な周期で教師が励ますような言葉を発する必要がある。

具体的には机間を歩いて各自のノートを見ながら、全体に次のような言葉をかけていくのである。

「正確にやるんやで」

「ここは習ったところだからできるはずやで」

「急がなくていいよ、ゆっくりと落ち着いて」

「ていねいにね」

「9 と 0 は間違わないように」
「漢字の”はね”はちゃんとできてるか」
「まだ、時間はあるよ。落ち着いて」等々
そして、同じようなところを複数の子どもが間違っていたら、全員に、「ここの部分はまちがいやすいから気をつけてね」などと、個別の間違いを全員にフィードバックしていく。ベテランといわれる教師は、こういう声がけが実に巧みである。思考の邪魔にもならず、モチベーションも下げないのである。いい声がけは、作業にリズムを与え、適度な緊張感さえ生み出す。そして、私語を封じる効果もある。

机間指導は適切に声をかけながら行うことが肝要である。

⑦ 作業の指示は必ず繰り返す

授業中に、ノートを開いて作業をさせることは多い。ところが、指示を一度しか言わない場合がある。やや抽象的な指示なら、子どもによってはノートを開いて下敷きを入れて鉛筆をもったとたんにやることを忘れる。そうなるとそれからの何十分間は、何をするのかがわからなく手持ち無沙汰となる。必然手遊びをしたり立ち歩くことになってしまい叱られる。子どもには無力感だけしか残らない。

作業の指示はできるだけ簡潔に何度も言ってやらなくてはならない。机間指導中にも必要なら個別にも言う必要がある。全員がその作業にとりかかるまで何度も何度も繰り返すことが大切である。ところが、指示を繰り返すたびに内容が少しずつ変化し子どもが戸惑うことがある。指示は簡潔に繰り返すことが肝要である。

a.指示の工夫

指示は、

「・・・して・・・まとめて・・・・書きます。終わった人は・・・して待っていてください」

と、一通り説明をする。このとき肝心なのは作業が終わったらどうするのかまでを指示しておくということ。たいていの場合子どもは「先生、終わったらどうするの」と質問するのが定番。だから、終わったらどう

するかまで言っておくことが大切である。

それからひとつずつ順番に指示を出す。

b.同時に複数の指示は出さない

また、「作者の気持ちが現れているところに線をひきながら、〇〇をノートに抜き出してみて」というような複数のことが同時進行するような指示は子どもにとっては難しいし避けた方がよい。特に小学校ではわかりにくい。抜き出すなら抜き出すだけと単純簡潔な指示をすることが大切である。

c.指示の追加・訂正はしない

指示に従ってせっかく子どもがやり始めたときに、指示の訂正や追加は禁物である。「あ、ごめん。ついでに意味を横に書いておいて」せっかくその気になってやっている子どもにとってはなんとなく面倒くさくなってくる。

作業の指示は、簡潔に繰り返すことが肝要である。

⑧常に複数の説明方法を用意する

授業では、第三の指導技術を駆使しながら教科内容の説明をする。授業ではこの説明が中心を占めるし最も大切である。ただ、ここでも、第三の指導技術が存在する。それは、必ず複数の説明方法を用意しておくことである。多くの場合、一度目の説明は理路整然となされることが多く、それは全く正しい知識や考え方であるのだが、子どもによってはやや理論的すぎて難しいことがある。そこで、二度目として全く別の観点からもう一度説明をすることが大切である。この二度目の説明は、理屈より感性に訴えるものなどの工夫をすると子どもの心にすとんと落ちる。

「言い換えれば・・・」「つまり・・・」「ということは、実はここはこうなる・・・」などの接続詞でなされる説明がこれにあたる。うまい教師は三度目もまた別の観点で説明をする。そして、子どもから質問があればまたまた別の観点から説明をする。ここまですると、子どもは理屈でわかり、感性で理解し、別の観点から理解する。ここが、よくわかる授業とそうでない授業の境目である。

数学であれば、答えが出た段階で別の式や考え方を書いて見せることもできる。国語であれば、解釈をしたあと主人公の気持ちを大阪弁で一言で言いきってみせるのもいい。歴史なら幕府の政策を庶民の目線で言い換えてみることも

いい。ただ、すべての内容について複数の説明方法を駆使するとなると、教材研究を相当緻密にしておかなくてはならない。教材研究が大切なのは、実はこのためなのである。

⑨きちんとする方が心地よい

小学校低学年だと、担任の先生がすべてであり、正義であると思っている。そこから公然と離反するのは子どもにとっては不安ともなりうる。なぜなら、自我がまだ未成熟なためほとんどの部分を担任に依存しているからである。そこから離反することは、自分の学校生活が立ち行かなくなることを意味する。

例えば、「はい、今お手てがひざにある子はかしこいよ」といったときにたいていの低学年は、さっと決められた姿勢をとり私語がいったんはやむことが多い。これはかしこいといわれた姿勢をとることで教師の期待に沿いたいと、ほめられたいという気持ちが湧くことによる。そしてそういう姿勢を7 割の子がとった場合にあとの 3 割がその姿勢をとらなかった場合、その 3 割は、先生から離反してしまうかもしれないという不安を抱くようになる。まして、その姿勢をとらないということは、7 割の友人からも離反してしまうかもしれないという心情におちいると考えられ、3 割の子どもは先生は友人からの離反を恐れ、やがて先生の指示する姿勢をとるようになる。つまり、きちんとした方が心地よい、と感じるのである。

この原則に則った第三の指導技術は多岐にわたる。集団行動時や授業の前、ともすればだらけがちになる学級会の前などに、様々な指示をこの言い方で表現すると、けっこう効果はある。ただ、この原則は、離反の不安を子どもに感じさせることが効果の基本であるので、指示を聞く子と聞かない子との間に分断の意識を与えすぎると、えこひいきの感情をもつ者が出てきたりすることもあるので注意が必要である。また、指示を聞かないグループに、どっちみちおこられてばっかりや、といった諦めの感情を持たせてしまうのもだめである。この方法での指示のあとは、全員に「よくできたねえ」とほめて、きちんとした方が心地よいと、子どもに感じさせることが大切である。

もぐらたたき状態になって、教室のあちこちでしゃべるのを注意し続ける状態になると、みんなが騒いでいるので騒ぐことが主流になり、騒いでいる子にとってはいささかも離反ではないと感じるようになる。むしろ、まじめ

にやろうとする子のほうが離反意識を感じるはめになり、結果として担任の指示が徹底しないことになる。

この方法の成功するこつは、教師がある程度のリーダー性を子どもに感じさせていること、指示をきく子が 7 割程度以上いるという見込みがあることである。7 割に指示を徹底しあとの 3 割に離反の不安を感じさせるから、全体に指示を聞かせることができるのである。

この方法は、小学校中学年以上にはあまり効果がない。なぜなら、自分がいうことを聞かない 3 割であったとしても、離反とは思わないからである。当然、それに伴う不安もないので結果として従わないままの子も出てくるのである。

⑩”儀式”をすることにより、次の課題に取り組ませる

これも小学校低学年の子どもには特に有効であるし、言わば必須条件とも言える。

大人からみれば、単なる形式主義と見える儀式も 1.2 年生にとっては、時間の区切りを意識させ、モチベーションを高めるためには極めて大切なことなのである。

例えば、国語の時間の前には、全員立って、日直が前で「これから授業を始めます」と言い、先生に礼をして静かにすわる、といったものである。こういった儀式をすることにより、授業を受けるという改まった気持ちになったり、少し緊張したりする気持ちにさせられると思われる。

儀式では、この授業では何を勉強するのかといった、授業のねらいを示すことも可能である。「今日は、昆虫の特徴について勉強します」などと教師や子どもが言ったりして、その時間の目的を子どもに感じ取らせることもできる。

儀式は、各担任が色々と工夫している。言わば腕の見せ所である。単に「さあ国語するよ、静かにしなさい」と始めても、子どもは休み時間と授業時間の区別がつかないままに授業に入ることになる。

しゃれた言い方をすれば、儀式は心と体のリフレッシュということになろうか。

小学校の支援学級では、朝音楽に合わせて踊って、朝の会の儀式をすると

ころがある。これなどは、儀式を行うことにより体と心をほぐして集団行動になじませやすくする効果がある。

中学の体育系クラブなどでも、この儀式が顕著に見られる。
円陣を組んであいさつ→輪番で掛け声をかけて体操→コーチの指示を聞く・・・等々。毎日、同じ儀式をくり返すことにより、モチベーションを高め、いよいよクラブが始まるという緊張感を持たせられる。

ただ、この方法は年度当初に場面ごとの儀式を指導徹底しておくことが必要である。低学年では、授業でわかった人は黙って手をあげる、あてられて名前を呼ばれたら「ハイ」と返事をして立っていすを机にいれ、答えをいう。他の子どもはその答えがあってたら「いいです」、まちがってたら「違います」と全員でいう、等々。

また、小学校一年生の当初、集会などできちんと列を整えさせようと思ったら、手を 2 回たたいて 3 回目は両手を前に出す、「とんとんぱっ」とリズムよく行わせると、「前にならえ」と同じ効果が得られ列が整っていく。これも、儀式を行うことで、課題に取り組ませる一例である。

とにかく、年度当初の集団訓練に相当な時間を割くことが、一年間のクラスの成否を決定するといっても過言ではない。

一見単なる形式主義のように見えるこれらの儀式であるが、子どもの集団訓練やモチベーションを高めるのに効果がある。なにより、私語を防ぎ集中させるためには、儀式を徹底し一年間きちっと同じことを履行していくことが大切である。

⑪抽象的な課題を具体的に指示におきかえる

1 年生が入学した直後に遠足がある。各クラス 2 列に並ぶというのは至難の業である。といって、ばらばらのままでは、引率に支障をきたしかねない。そこで、どうするかというと、まず事前に 2 列に並ばせてペアを確認させておき、当日はとなりの人と手をつながせるのである。これで、見事に列が構成される。2 列に並ぶという抽象的かつ難しい課題を、となりの人と手をつなぐという具体的な指示に置き換えてしまうのである。これなら、1 年生には十分可能である。

授業で早く準備をさせたいときがある。「用意できた人は背筋を伸ばして

こっちを向いて先生に合図して」という言い方もある。一年生、二年生ならこの言い方は十分成立する。みるみる姿勢がよくなって、全員が先生に注目する。非常に具体的な所作の指示ではあるが、授業に取り組むための心と体の準備ができてしまうのである。抽象的な指示を具体の指示に置き換えた好例である。

また、列を整えなさいといっても自分が列の全てを見ているわけでもないので、実に難しい。ところが、「前の人たちの頭がひとつに見えるように並びなさい」、とか「前の人の頭を見なさい」とか言うとわりと速やかに列が整っていく。

体育館で、全校集会を開くときなどには入場した順に座らせていく。すぐに座らせるのは動き回るのを防ぐ意味がある。ただ、おしゃべりはこれではやまない。全員入場したら一度全員立たせる。そこで列を整えさせたら「黙って座りなさい」と声をかけ、座らせる。おしゃべりがあれば、これをもう一度繰り返す。こうすると、列も整って静かに座った状態にすることができる。このように、抽象的な課題をいかに具体的な指示に置き換えていくかというのは、非常に大切な「第三の指導技術」である。

小学校で体育館で集会を行うときなどは、「先生の声が聞こえた人は手をあげてください」と声をかける方法もある。不思議なことに、手をあげることで話がやんでみるみる静かになっていく。静かに聴く、という抽象的な指示を具体的な行動で指示をしたいい例である。

本読みの時に「本は立ててもちましょう」というのは、単に見やすくするためではない。

両手で本を持つことによって、手遊びを防ぐ効果がある。手遊びがなくなれば当然、本読みへの集中は増す。低学年では、本読みのときに指で文字をなぞらせる方法もある。

体育座りも、手で足を抱えることになるので、手でとなりの人を突っつくことが防げる。

これらは手遊びを防ぐと同時に集中を増すよい方法である。

話をしっかりと聞かそうと思えば、「全員目をあわせて」と全員の目をみていく方法もある、また、あらかじめ決めておいた「聞く姿勢」をとらせる方法もある。背筋を伸ばして手はひざ、目は先生に、といった姿勢である。

小学校では、聞く姿勢をとらせる方法として、「手はどこにありますか・・・・。足はどこにありますか・・・・。顔はどっちを向いていますか・・・・。口はどうなっていますか・・・・」とひとつずつ聞いていく方法がある。低学年であれば、これで聞く姿勢が次第に出来上がっていく。また「上のくちびると下のくちびるが、がっしゃんこしていますか。よし静かになったよ、えらいね」「お口はチャック」という方法もある。ただ、低学年がチャックを知っているかどうかは疑問ではあるが。もっと端的には、「歯が見えていませんか」とせまる方法もある。低学年なら意識して口をつむるようになる。

そういう姿勢をとったから、本当に真剣に聞いているのかといえば疑わしい面もあるが、少なくとも何もしないときよりは集中力は増すと思われる。この「聞く姿勢」コールも事前の徹底した集団訓練をしていないと成功しない。

成功しないまま「聞く姿勢」コールを連発すると、それは聞かなくてもいい指導になり、何度言ってもだめになる。徹底した訓練があり、かつ絶対に聞かせるという覚悟が教師の側に必要である。そして、裏には、「聞く姿勢」を聞かなければ叱られるのではないかといった気持ちを子どもに持たせておくことも必要である。

⑫自尊心に訴える

小学校高学年以上なら、この方法は十分有効である。ただ、今まで述べてきたような即効性はない。しかし、「このクラスはこんなにだらしないクラスだったのか。ぼくはいささかかっかりしたよ。このクラスの力はこんなものじゃないだろう」「この学年はなんてすばらしいんだ。こういうことができたのだから、授業だってきっと熱心に受けられるはずだ」といったよびかけである。すぐに効果がでるものではないが、それ以上くずれなかったという印象がある。全体・個人に対しても基本は同じである。

ただ、この方法は、先生と子どもの信頼関係のあることが前提となるので、日ごろから子どもと信頼関係を作っておく必要がある。少々浪花節調ではあるが、子どもには先生に見放されてはいけない、先生を悲しませてはいけない、と感じさせることが大切である。

中学では、課題を抱えた子どもにこの方法は有効であった。こういう子ど

もに対して叱るべきは叱るが一人の人間として認めて自尊心に訴える方法は彼らの中の誇りを満たす。時には、その誇りを広げることもできる。

ピアスをつけていた生徒に対して、この方法で話をした結果、卒業式の日だけはピアスをとってくれたことがある。

⑬子どもに直接アクセスする言葉をはさみこむ

授業技術にいかに改善を加えたところで、究極のところ授業は話術の芸である。研修会の講演を聴いていても、眠くなるときと眠くならないときがある。いくら正しい崇高なことをいっていても、同じ調子でしゃべられると眠くなってくる。

授業でも正しい知識ではあってもただだらだらしゃべっていては、子どもはついてこない。知識を話しているときというのは、教員と子どもの間に知識というものが介在する間接的な関係であって、教員が直接子どもにかかわっていない瞬間であるので、時には眠くなるのである。したがって、話の間に、息の継ぎ間に、子どもに直接アクセスする言葉を挟みこむ必要が出てくる。

「・・・いぃい、わかるぅ・・・」とか

「・・・ええか、ここ大事やから聞いとけよ・・・」

「・・・ここまでわかるか・・・」

「･･･ここまでええか、次、いくで・・・」

「・・・することにします。わかるぅ」

など、教師によって様々であるけれど多くの教師が無意識のうちにこういう言葉を使っている。ベテランなどは、この直接アクセスする言葉を何種類か持っている。そして、こういう言葉を説明の合間に挟み込むことによって、子どもの集中力とモチベーションを高めていくのである。と同時に話の調子を整える働きもする。これは、「話にめりはりをつける」と表現される。

いい授業をしようと思えば、子どもに直接アクセスする言葉を、子どもの反応を見ながらいつどの程度入れていくかを判断できればいいのである。

これも、極めて有効な第三の指導技術である。

⑭満面の笑顔

教師は、総じて笑顔のいい人が多い。叱るという奥の手も大切だが、満面の笑顔はもっと大切である。大勢の子どもを制御しようと思えば、まず笑顔で子どもをつかむ必要がある。先に子どもがほめた方向を向くということを書いたが、笑顔にも似た効果がある。

教師がにこにこと笑いながら、「そろそろ席につこうか」などと指示するほうが、こわい顔をして怒ってばかりいるよりよほど効果がある場合が多い。

話はかわるが、授業は一席の落語とよく似ている。まず「出」がある。噺家はにこにこと笑いながら舞台に現れる。客はここで雰囲気に入る。授業でもまず教室にはいるときには、教師は笑顔を作って入る。子どもはここで先生の人柄に引き込まれる。

次に落語では「つかみ」がある。いわゆる突拍子もないような面白いことを言ってまず客をつかむのである。教師も、授業のはじめには簡単な世間話をしてみたり、テレビの話、天気の話をしたりして、子どもをつかむ。落語は途中でだれ場といった、いわゆる本筋からの脱線がある。教師も授業の途中にうまくだれ場を作ることが必要である。子どもを一回でも笑わせれば気分転換になる。

落語は「落ち」でおわる。教師も、授業の終わりのまとめでは、子どもにすとんと落ちる話をすることが必要である。「ああ、なるほどな」と子どもに感じさせることが大切である。

話は少しそれたが、満面の笑顔は子どもの心をつかんだり、全体を制御するためには大切なものである。笑顔は教師の武器とも言える。

私は教師の資質のトップには、満面の笑顔をあげたい。

いつもにこにこしている教師がたまに仏頂面をしていると、子どもは何かあったんだなと思い、子どもたちの間に緊張が走る。こういうことを利用するのも手ではある。

叱れば火を吹くほどこわいが、ひとたび笑顔を見せれば子どもたちの心を一瞬にしてなごませてしまう、そんな教師が理想である。

いずれにしろ、満面の笑顔は教師の基本であると心得たい。

⑮驚く

発問をしたら、様々な答えが出てくる。教師は、すべてについてとは言わないが、時には心の底から驚いてやることも必要である。

「この考えは、なかなか鋭いなあ。びっくりしたわ」

「そうか、こういう考え方があるのか。先生も全然気がつかなかった」

「ほう、これはすごい発想や。目のつけどころが違うなあ」

などと、教師がしっかりと驚いてみせると、子どもは得意になってもっと色々な答えを出そうとする。特に算数や数学では、同じ問題でも式の立て方がいくつもできる。中には、非常に個性的な式の立て方をする子もいる。そういったユニークな発想には、素直に驚いたらいい。子どもは盛り上がること間違いなしである。

この方法は中学でも極めて有効である。

授業中にふだん集中できていない生徒が珍しく突飛な発言をした。私は、それをとりあげ「なかなか鋭いなあ。なるほどいい質問や。これは鋭い」と驚いてみせ、少し時間をとって説明した。本人は得意満面の顔をしていた。次の時間からその生徒は鋭い質問をしようと授業を聞くようになった。

はじめの方で、教師には演技力がいると書いたがこういう場面で発揮する必要があるのである。

⑯涙がキラリ

教師の涙も時には有効に働く。

あるクラスでいじめが発生した。男性の担任は常日頃からいじめについては熱心にクラス指導をしていた。担任は、いじめを受けてクラスで約 1 時間の予定で講話を始めた。

「ぼくは、いじめをなくそうと一生懸命指導してきた。こういうことが起こって大変残念だ」男性の担任の目には涙が浮かんでいる。時折、嗚咽をこらえるのに言葉がつまる。子どもたちは、担任ががんばっていることを知っているし、担任の先生が皆大好きである。だから、悲しませてはいけないと思っている。そこへ、思いがけず担任の涙を見たのである。子どもたちは相当動揺した。その担任は、話の途中で洗面所に言って顔を洗いに行った。その間にいじめをしていた子どもは、自ら名乗り出て被害者のところまでいって

謝罪をしたというのである。担任が戻ってきたときには、すべてが終わっていたということであった。

これは、担任が日ごろから熱心に指導をしていたこと、子どもたちから抜群の信頼があったこと、そして担任が全身で子どもたちにぶつかっていった結果の涙であったことなどが、この指導を成立させた要件であったと考えられる。

要は、日ごろの指導と信頼が大切であるということである。時には、涙も子どもに何かを訴えるのである。

しかしである。絶対に流してはならない涙がある。クラスの子どもが騒いで授業にならない。注意してもきかない。若い担任は泣いてそのまま授業を中断して職員室に戻る。こういう教師は子どもから信頼を失う。

こういう涙は絶対に流してはならないのである。

⑰視線を細かく走らせる

授業中、優れた教師を観察していると目の動きが常に子どもの様子を観察していることに気がつく。授業中しゃべっている子どもがいたとすると、優れた教師の目は必ずその子を視野に入れている。そしてチャンスをうかがって注意を与える。

常に目玉を動かして学級内の様子を観察・察知しておかなくてはならない。一人の子どもに指導しながらも、教室の隅の子の動きにも目を走らせておかなくてはならないのである。

教師は、個と全体を常にバランスよく見ておかなくてはならない。学級のざわつくところを見ていると、教師が完全に個人のノート点検などに没入してしまっていることが多い。ノートを見ながらも何秒かに一度は全体に目を走らせることが大切である。そして全体に注意を与える。全体に注意を与えたら個人のノートを見る、これを繰り返すのである。

いい体育教師は、全員に実技をさせながらほぼ全員にアドバイスをしたりほめたりする。よくあれだけ見られるものだと感心したことがある。

細かくかつすばやく目を走らせることは、非常に大切な第三の指導技術である。私は教師の資質の二番目には、目がよく動くことをあげたい。

⑱クイズをしてみる

授業は色々と工夫するとしても、ものごとを言葉で伝えることは否定のしようがない。

説明をしている最中にどうにも単調になってきたと感じることがある。それは自分でもわかるし、子どもの反応を見ていても頭が下がりだし、自分と目のあう子どもが減ってくる。単調になってきている証拠である。

こういうときに、頭をあげさせ気分転換をさせる方法としてクイズがある。

例えば、社会科なら、「さて、ここでクイズ。このとき義経はどうしたでしょう」と切り出し、黒板に選択肢を 3 つほどかく。そしてひとつずつに手を上げさせる。このときは手をあげてもあてない。

無責任でいいからとにかくどれかに手を上げさせる。「正解は・・・です」というと教室は、わーっと盛り上がる。その後は見事にリフレッシュする。こういうことを授業の途中にときおり挟み込むことによって、授業の単調さが解消されるし、同時に気分転換にもなる。

また、こういう方法もある。一年生の当初に見た一瞬である。その日は鉛筆の持ち方を習う日で、担任が鉛筆を手にもって注目させようとするがなかなか子どもが注目しない。そこで担任はどうしたか。鉛筆を後ろにさっとかくして「今の鉛筆、何色やった?」と聞いたのである。口々に「○色」と声があがる。「ほらほら、見てない人はわからないでしょ」とたたみかける。このあと、静かに集中するようになったのである。ベテランの一瞬の芸であった。まさに究極の第三の指導技術であった。

⑲発問とその対応を工夫する

a.発言を引き出す

発問の答えをもっと引き出そうと思えば、「なるほど、なるほど」と対応する方法もある。「そうやな」と言ってしまえば、それで正解ということで終わるが、「なるほど」なら正解かどうかわからないので発問の答えがもっと出てくる可能性がある。特に道徳の時間においては、「なるほど」が最も適している。なぜなら、道徳の時間は正解を出させることが目的ではなく様々な価値観のあることに気づかせるのが目的だからである。

授業の活性化のひとつとして、発問の答えに対してぼけてみせるなど対応

を様々工夫することは有効である。

また、ある内容に対して、「どう思った?」と発問した場合に、色々と意見がでればいいが、全くでなければどうすればいいか。

先生「どう思った?」

児童「・・・・・」

先生「先生はこんな風に感じたけど、同じように思った人は手を挙げてみて」と切り替えしてみる方法もある。手をあげるだけなら参加してくる児童も多い。こうして、次の内容に進んでいくのである。

b.答えが出過ぎる場合

逆に発問に対して、答えが出すぎることがある。こういう事態にならないように、発問をする前に答え方のルールを決めておくことが必要である。

また、答えの数や様々な答えに対する対応を用意しておかなくてはならないのである。

それでも、教師側がある程度ねらいとしていた答えではないものが次々と出てくることがある。こういう場合は、発言した子どもの心を傷つけないで、適切に収束していくことが必要である。色々と出そうだと感じた時点で「あと、二人だけから意見聞くよ」と人数を限る方法もあるし、「なるほど色々な考え方があるんやな」と様々な考えにうまく反応をしてから本筋に戻すなり、その時に応じて判断せねばならない。うまく反応する技術にはこれという定石はない。その場で判断する”アドリブ”となる。これはある程度の経験が必要である。

私が経験した学校でのことであるが、ある教師は発問に対する答えのルールを全く決めていない上、答えが無数に出てきたときに収拾する力もないため、無数に出てくる子どもの答えにいらだち、ついには切れて怒り出したことがある。これは第三の指導技術を身につけていないのに、外見上”いい授業”の真似をしてしまったことによると思われる。

c.発問にたいする答えさせ方の工夫

発問に対する答えさせ方にも工夫がいる。手をあげて答えさせる方法は最もオーソドックスである。中学校の高学年では、ほとんど発言がないので、

口々に言わせることもある。

前に出て、みんなの方を向いて発表させる方法もある。これは学級で静かに聞くという訓練ができていないとこの方法は成立しにくいし、発言する子どもが傷つくことがあるので注意が必要である。また算数などでは黒板に答えを書かせる方法もある。こういった方法を適宜取り入れると、授業に変化が出てくる。

テレビのクイズ番組をまねする方法もある。解答者が司会者の耳元で解答をささやく、あれである。「わかった人は先生のところまで来てそっと教えて」というと、先生と直接話ができるということで喜ぶ子も出てくる。

この場合誰がどう答えたかがわからないので、正解を求めてクラスは盛り上がる。

黒板の前まで行って答えるような方法は、体を動かすことにもなるので授業の単調さが解消される。子どもが動いて答えを表明する方法は、手を上げさせるよりはざわつくことが多くなる。この場合には、ざわつきを制御する技術も持ち合わせている必要がある。

班で相談して班長に答えさせる方法もある。なかなか発言しない子どもも班での相談となるとけっこう話をする。答えをいくつか列挙させたい場合や、国語・道徳のようにいくつもの答えが予想される場合、また算数で考え方を発表させる場合などには、班で相談させる方法は有効である。一斉授業の中にこの方法を取り入れると授業は一気に活性化する。ただ、班で相談する時間を確保する必要がある。この方法を成立させるためには、日ごろから班作りをしておくことが大切である。

また、席の順に答えさせる方法もある。全員にあたる利点があるが、自分の番が過ぎると緊張がとける。ただ、テンポよく進むので、テストの答え合わせをするときなどはこの方法は有効である。

名簿を見ながらランダムにあてる方法もある。この方法は、子どもの側から積極的に発言するという面ではマイナスであるが、学級全体に緊張感が漂うという利点がある。中学校ではほとんどこの方法となる。

⑳ものわかりの悪い教師を演じる

授業で子どもが発言したり答えたりした場合、教師は一を聞いて十を知

ってしまったらだめである。ここは、わざと「ものわかりの悪い教師」を演じることが大切である。「えっ、どういうこと・・・」「あっそうかこういうことか、えっ違う。もうちょっと説明して見てや」などと、ものわかりの悪い教師を見事に演じると、子どもから色々な言葉が引き出せるだろうし、子供にたくさんの言葉でしっかり説明させることもできる。

ただ、これも答えた子どもをいたずらに追い詰めるものであってはならないし、ものわかりの悪い演技を見破られてしまってはだめである。

こうして、子どもに突っ込ませるために、子どもの発言に対して教師がわざととぼけてみせるのは、小学校中学年あたりで非常に有効な方法である。

この方法は、小学校や中学校でも使えるが、この方法を使いすぎると答えた子どもにいやがらせをしているととられることがあり、注意が必要である。子どもの答えの言い方にまで立ち入ってぼけるのは、からかいととられかねないので注意が必要である。子どもの答えをしっかり受け取って、さらに展開した発問をして正攻法で次の答えを誘発するほうがよいと思われる。

私が小学校で見た限りでは、中学年あたりが一番乗ってくる。しかし、この教師のとぼけ方も技術のいるところで、子どもがもっと詳しい説明をしたくなるようにぼけなければならないのである。

見破られないように、そして子どもがついつい夢中になって発言していくような「迫真の演技」が教師には求められるのである。

㉑.融通のきかない教師を演じる

これは、いままでも多くの項目で書いたが、いったん学校やクラスや部活動のルールを決めたら、子どもに守らせることが必要であり、徹底しなければならない。特に授業を聞くルールはすべてのルールの基本であり、いったん決めたら妥協せずがんこに徹底することが必要である。

そのためには、融通のきかない教師を演じることが必要である。雑巾は必ず絞ってひもにかけておくというルールを決めたら、違反があればすぐに当該の子どもを呼んで指導することが大切である。このとき、まあ今日くらい自分がこの雑巾を絞っておいてあげよう、きっとあの子は自分に感謝するに違いない、などという甘い幻想を抱くと誰もその教師に感謝などしないし、

その後も雑巾を絞るというルールは守られなくなる。

中学校で指導力のない教師を見ていると、校内ルールの摘要などで融通をきかせることが子どもに支持される近道であると思い込んでいるようである。

それは大変な勘違いであって、きちんと徹底して指導する教師の方が長い目で見ると子どもから信頼されるし支持されるのである。

㉒.立つ位置の工夫

退屈と思える授業をしている教師を見ると、同じ場所でしゃべっていることがある。同じ方向から声が聞こえると、子どもにとっては単調であるとの印象を持たせてしまうことになる。

教卓の右側に立ったり、時には左側に立ったりして声の方向は響き方を変えることで、子どもの右脳・左脳に刺激を与えることができる。

また副次的な効果としては立つ位置を変えることにより、授業中に「内職」をしている子どもを見つけやすくなる。

机の上に余分なものがある場合にも見つけやすくなる。また、ノートをとる手が不自然に遅い子も発見できる。こういう場合は、家で何かあったか、けんかしたか、いじめにあっているかなど推測をめぐらしながら観察する。

小学校では全員で一斉に本読みをする「群読」をすることが多い。このとき、教師は机の間の通路を歩きながら子どもの様子を見ておくことが大切である。

前から見ていると子どもの口が動いているか、目が教科書を追っているかがわかる。ページをめくる直前には後ろに立っていることが必要である。なぜなら、ページを一斉にめくるとページの挿絵の色などが一斉に変わっていくわけであるが、中にはいつまでもページの挿絵の色が変わらない子ども、つまり、集中していないためにページをめくるタイミングをはずしている子供を発見しやすくなるのである。こういう子どもを見つけたら、注意を与えておく。

体育においては、教師は子どもに背中を見せてはいけない。これは、別に心理的な意味合いで言っているのではない。体育の授業においては子どもの安全確保が最重点事項である。

従って、常に子どもたち全体が見える位置に立っておく必要があるのである。だから背中を見せてはいけないのである。小学校でも中学校でも基本は同じである。体育は、一時間のうちどれだけの時間子どもを見ていたかが問われる。

仮に跳び箱の時間とする。経験の浅い教師は跳び箱だけを見ていて、飛び方やフォームを指導する。これはこれで大切である。しかし、跳ぶ順番を待っている子どもがけんかをしたらどうなるか。列に戻ってきた子どもと走り出した子どもが交錯したらどうなるか。実は、待っている子どもにも目を走らせなければならないのである。

ベテランの教師になると跳び箱と跳ぶ順番を待っている子どもが両方見える位置に必ず立っている。体育では、指導する位置が大切なのである。以前私の経験した学校で、体育は自主的にということで授業内容は子供に任せてひたすら白線をひいている体育教師がいた。案の定体育の時間中に子ども同士が大げんかしても気づかなかった。責任が問われたのは言うまでもない。

体育の授業では、特に「指導に立つ位置」が肝心なのである。

㉓.アニメのキャラクターを利用する

これは小学校では多くの教師が実践している。小学校の低・中学年あたりでは有効である。

テレビの人気キャラクターの絵を黒板に貼り付けて、そのキャラを登場人物にして説明をしていく。時には、吹き出しを作って説明をしていく。

キャラを二人作れば、キャラ同士でぼけ役とつっこみ役を設定して説明できるという利点がある。ただ、少々準備に手間がかかる。

しかし、子どもにとっては、親しみやすいし説明がやわらかく感じられるという効果がある。

㉔．大きな声

第三の指導技術の基本は大きな声、である。何も怒鳴れといっているのではない。学級全体に届くだけの必要かつ十分な声が必要だということである。

言わずもがな、声はすべての情報を言葉に変えて伝えるための重要な手段である。しっかりと大きな声で話すことは教師の基本である。

また、声の大きさは人間の生命力の表れでもある。教師は、子どもに自らの生命の息吹を声という手段で伝えるのだとも言える。

教師の元気な声は、情報を伝えるのみならず、子どもに元気と希望を与える。

㉕.話術

いかなる授業も言葉で説明し伝える。従って、話術が極めて大きな比重を占めることになる。

a.言葉の速度

早口で話すのは、教室という場面では聞き取りにくいし、注意力も散漫になる。かといって、遅いのは眠気をさそう。肝心なのは子どもが一つ一つの言葉をきちんと聞き取れる速さであること、そしてなにより大切なのは緩急をつけることである。大切なところはゆっくり話すなどの工夫をすることで変化をつけることができ、子どもの集中力を高めることができる。

授業中子どもが口々に質問などでしゃべることがある。そういう時に、教師が同じリズムでかぶせてしまうと、教師の声が子どもにとどかないことがある。そういう時には、子どもたちの話し方とは全く異なるリズムでしゃべることも必要である。子どもが早口でしゃべってくるならわざとゆっくりと噛んで含めるように話すことも有効である。

b.言葉の難易度を考える

発達段階に応じて言葉を選んで使うことが大切である。大人の感覚で話すと子どもにとっては難しい場合が多々ある。例えば、「責任転嫁をしない」という言葉は中学 1 年でもよく理解できない。発達段階に応じた言い換えの技術を持っていることが大切である。

小学一年なら「自分がしてしまったらごめんなさいっていわなきゃだめだよ」

小学四年なら「自分がやったことは自分で責任をとらなきゃ」

中学一年なら「自分がやったことなんだから、きちんと認めて反省することが大切だ」

中学三年なら「責任転嫁をするな。それではあまりに無責任だ」

などと、発達段階に応じて言い換えることが大切である。

c.「間」

落語や漫才をよく聞くと、フレーズとフレーズの間に一瞬の間がある。特に絶妙の「間」というものは、名人の落語を聞くとよくわかる。一秒あければ笑いは起こらない、ゼロコンマ何秒かの間をあけることで、笑いが起こるのである。授業でも同じである。だらだら単調に話すのは眠気を誘う。「間」を入れることで俄然子どもが前のめりに話をきくようになる。どこでどの程度の「間」を入れるか、経験と訓練で身につける以外にはない。ぜひ、桂米朝あたりの落語を聞いて、高度な「間」を感じ取ってもらいたい。

間違っても 5 秒、10 秒の「素」を作ってはいけない。説明の途中で先生が 5 秒も 10 秒も黙るのは、子どもの思考を鈍らせ、「しらけた」状態にしてしまう。

d.自分でつっこみを入れてみる

説明をしている時に、教師が自分でつっこみを入れる方法もある。私はこの方法をよく使った。「そんなもんできるはずないやろ・・ところがちゃんとできるんや」とか、難しい説明の後「こんなんややこしいやん、と思うやろけれど、実はこうしたら簡単になるんや」などと、自分でつっこみを入れてみるのは、効果絶大である。これのコツは、説明しながら今多くの子どもがこう感じているだろうということを機敏に察知して、そのことでつっこみを入れてみるのである。これをうまく使うと、授業中の沈滞したムードが一変する。

e.声色

説明に変化をつけるためには、少し声色を変えてみることも大切である。べつに登場人物ごとに変えるという意味ではない。説明の内容によって少し声色を変えてみるだけで変化をつけることができる。変化がつけば子どもは飽きないわけである。

とどのつまり、授業は話術に尽きるというと、授業はもっと深い精神的なものだというお叱りを受けるかもしれない。しかし、話術は最終的には教師の「武器」となる。今後は第三の指導技術の中でも、もっと話術にスポットをあてて磨いていくことが大切である。

㉖.授業に変化をつける

説明をしているときに、ついつい夢中になって長くなることがある。子どもはたいてい初めのうちは顔を上げて聞いている。しかし、説明がくどかったり変化がない展開では徐々に頭が下がりだす。教師はその瞬間を見逃してはいけない。それは集中が切れかけた証拠。教師は、次の展開に切り替えなくてはならないのである。

授業に変化をつけるのは、授業の基本と心得たい。

授業は、内容もさることながら子どもが飽きない工夫をすることが必要である。飽きさせないためには 1 時間の中に色々な変化をもたせることが必要である。一時間の中に、読む、聞く、書く、等の作業を織り交ぜることが大切である。国語では、まずみんなで読む、先生の説明を聞く、漢字を書いてみる、など様々な変化をつけることが大切である。特に書くという作業は、子どもにとって最も参加しやすくわかりやすい作業であるため、小学校、特に低学年では国語の時間に書く作業は必須と心得たい。1 時間すべて読む作業だけでは、中学生でも飽きてくる。

また、読むという作業でも、群読、個人読み、個人が気持ちをこめて読んでみんなで感想を述べ合う、男女別に読ませる、班別に読ませる、等々バリエーションを次々と変えていかないと子どもは飽きる。

数学・算数でも、先生の説明を聞く、各自で解いてみる、黒板に出て解答を書く、みんなで答えあわせをする等々、変化はいくらでもつけることができよう。

㉗.子どもの前で迷わない

学級経営や授業では様々な不測の事態が発生する。教師はその都度どうするか素早くかつ的確に判断しなければならない。教師は子どもという集団のリーダーであり、子どもの前でどうしようかと迷ってはならないのである。

授業で予定のことをすべて終わってまだ少々時間がある。「外に出て遊んでいいよ」といってから「待った、やっぱり出てはいけない」そして「どうしょうかな。何か勉強したいことあるか」そして「国語の書き取りしようか。あ、今日は国語のない日か」あげくは「みんな、余った時間どうしたらいいと思うか」などと迷走するのは、激しく子どもから信頼を失うことになる。

これを防ぐためには、あらかじめ様々な不測の事態を想定しておいて、対応を用意しておくことである。そういう意味では、教師は常に危機管理を行う仕事であると言える。あとは、平素からすばやく決断をする訓練をしておくことも必要だろう。

教師は子どもの前では決して迷わないことが大切である。例え判断に迷ったとしても数秒程度でないと子どもから「たよりない先生」と思われる。

教師の資質として、決断力は欠かせない。

㉘.一人はみんなのために

授業中に質問がでることがある。その時にややもすれば、質問した子どもに向かって説明をしてしまいがちである。そうなると、授業は先生と質問をした子どもだけで進むことになり、他の子どもはおいてけぼりを食うことになる。

一人から出た質問は、教師がもう一度その質問を復唱し、全体に対して説明をする。一人の子どもから出た質問は氷山の一角というとらえ方をすることが大切である。「一人（から出た質問）はみんなのために」である。

㉙.授業でのフォーマルとインフォーマル

授業には大きく分けて二つの場面が存在する。それは、教師が一方的に話すときと、子どもと対話をする場面である。教師が一方的に話す場面とは、言いかえれば「フォーマル」な場面であり、指導の中心を成す説明の部分であり基本的に子どもが口をはさむことは許されない時間である。したがって、ここは子どもにしゃべってはいけないことを徹底しておく必要がある。

もう一つは、教師が子どもと対話したり作業をさせる場面であり、言い換えれば「インフォーマル」な場面である。それは、発問とその答えであったり、子どもが自由に発言したりできる場面である。

実は、この二つの場面は授業の前半・後半というようにはっきり分かれるものではなく、目まぐるしく入れ替わることが多い。言わば 3 分ごとにこの二つの場面が入れ替わるのがいい授業であるとさえいえるのである。

すぐれた教師は、いちいち入れ替わったとは言わないけれど、フォーマルな場面では、子どもに今はフォーマルな場面だよと十分感じさせることができるので説明中は子どもの私語が激減する。発問などのインフォーマルな場面では、

子どもとの対話を楽しむかのような雰囲気を作り出す。ところが、指導力が不足している教師は、1 時間中フォーマルな態度を子どもに要求し続けたり、逆にインフォーマルな雰囲気に終始したりする。要するにめりはりがつかないのである。「今はフォーマルな場面だよ(だから静かに聞こうね)」ということを子どもに感じさせるにはどうしたらいいのか。それは、年度の最初に各クラスなどで、約束事を決めて徹底しておくことである。三つ目の項目の「三日坊主」に詳しいことは書いたので、そちらに目を通してほしい。そして最後は教師の大人としてのすごさやけじめにかかるところが大きいと思われる。

4.第三の指導技術成立の要点

縷々述べてきた第三の指導技術を成立させていく要点は二つある。

一つ目は、年度当初にルールや約束事をしっかりと指導しておくことである。このことは、すでに述べたので省略する。

二つ目は、一つ一つの所作・動作・約束について、その都度徹底していくということである。そもそも、これら第三の指導技術は教師と子どもの暗黙の契約関係で成り立っている。契約は確実に遂行していないといつしか有名無実となる。従って、一つ一つのことについて、その都度徹底して子どもに履行を求めることが大切である。三回中途半端で終わらせると次回からその指導は成立しないと知るべきである。

三つ目は、教師は総合芸術家であると割り切ることである。演技も表情も巧みに磨くことである。

5.あとがき

ここまで、書き終えてみて、教育とは愛情や熱意のみならず、緻密な調査と深い読みに裏付けられた科学技術であると確信するに至った。そして、教師は専門職であると同時に技術職であったことに改めて思いを致したのである。

そして私が行きついた結論は、「教師とは科学技術を駆使する総合芸術家である」ということである。

私が述べてきた第三の指導技術なくしては授業は成立しないと言っても決して過言ではない。この技術は教案に味付けをするにとどまらず、むしろ

授業や全ての指導に緻密さを付与するものであるとさえ言えるのである。

第三の指導技術をできるだけたくさん身につけて子どもの観察をし、十分「読み」を入れてこのテクニックを多彩に繰り出すことが大切である。

第三の指導技術をうまく駆使すれば、授業等の指導は非常に緻密かつ豊かなものになる。

これまで書いたものは、私が体験したり見たり聞いたりしたものに過ぎない。今後、各自が他の教師の指導の中にきらきらと点在している第三の指導技術を感じ取り、身につけていかれることを切に希望する。